



## 開院50周年記念碑

一昨年暮れにふと思い出したように、平成31年には私が心機一転して診療所を開設してから丁度50周年を迎えることに気づいた。そこで開院50周年記念の行事として、初めて記念碑を建てようとの気持ちが沸いた。私がこの地に開業したきっかけはその時代の環境変化にあり、今まで静かな天霧山の山麓にあった我が家の近隣に巨大な採石場ができ、その騒音と粉塵は永久居住には不適切と考え急遽転居して開院する気持ちになった。それは昭和44年2月4日のことで、あれから50年の歳月が過ぎたことになる。

ところで記念碑を立てるとなるとその素材や設計についていろいろ気配りをする必要があると考えた。そこで診療所や住居の建設で常にお世話になっている設計士に尋ねてみると、石碑と言えば庵治石が最適でしょうとの事であり、庵治石についての資料を参考に勉強してみることにした。庵治は高松市の東に隣接する石の里で、山全体が花崗岩の層からなる八栗五剣山に抱かれた牟礼町、庵治町にまたがる地域で、そこから庵治石は産出されていると知った。

この庵治石は日本三大花崗岩の一つとしても知られ、今では世界でも花崗岩のダイヤと呼ばれて高く評価されている石材である。きめ細かな地肌であるがゆえに風化に強く、磨けば磨くほど艶を増していく。正式名称は「黒雲母細粒花崗閃緑岩」で主成分は石英と長石そこに少しの黒雲母が含まれているため、庵治石には「フ(班)」と呼ばれる珍しい表情が現れてくると記されている。

石材という観点から花崗岩は細目(こまめ)、中目(ちゅうめ)、粗目(あらめ)と分類され、庵治石は細目と中目に分類されており、きめ細かな模様のかまめになるほど貴重品として扱われる。また水晶に近い硬度をもつことも庵治石の特徴であり、更に結晶が小さく緻密であるから細かい細工が可能である。それゆえに、庵治石は丈夫で美しく文字や模様が崩れたり変質したりしないという。昭和35年頃になると加工の機械化が進み、事業の拡大がすすみ庵治石製産地として有名になり発展してきた。

この様な予備知識をもって一度庵治石を見学しようと思ったが、昨年の春から夏にかけては異常気象の時期が続き、私も熱中症に悩まされて石切場を訪ねることが出来なかった。しかし秋が深まってからは現場を見に行き、石の素材と石碑に刻む内容などについての意見を重ねることにした。そこで二種類の3~4トン程度の石材を選出して形態や色合いなどを比較し検討した結果丸みの

あるやや大きめの石に決めた。(写真のような)

そこで50年前に恩師黒田嘉一郎先生から開院記念にと戴いた色紙の文面をそのまま石碑の前面中央に刻んで頂くことにした。その色紙は先生の達筆な崩した筆跡で刻みこみの難しいものであったが、石屋さんの技術で見事に再現させて頂き感謝の気持ちで有難かった。

次にこの石碑を何処に据えるかを検討し、場所的に見て現在の診療所出入口の北側にある空き地は通路にも面して、患者さんから一番目に付きやすい場所と思われ、そこに安置することとした。ただその周囲には建物や樹木、県道などがありレッカー車が作業しにくい点もあったが、石屋さんの見事な作業によって綺麗に据え付けが終わり喜んでいるところである。なお石碑の裏面には開院50周年の日付けと、現院長の氏名が記されている。

話は変わり、今年の4月1日に新元号が発表され、5月1日から実施されることになっている。これを機に日本の国民全員が心機一転の気持ちで日本の将来に大なる期待を寄せるものと思われる。4月からはそれを祝福するかのよう一年中で一番艶やかな明るい春季であり、日本人が一番親しみを覚える桜の美しい季節ともなり4月から5月にかけて桜前線が日本列島を北上する。花見と言えば桜を指すのは平安時代からの代名詞で、平安の貴族が桜の花に心を躍らせ、桜花を愛で花見の宴を開いて楽しむ風習を築いたと言われる。

毎年このこととして桜の開花予想はマスコミが報道し、人々はそれを目安に花見の計画を立てるものである。その開花予想にはソメイヨシノの開花を基準にしているが、これはソメイヨシノの特質として一本の原木から接ぎ木や挿し木で増やされたため遺伝的な性質が同じで開花の標準に適しているからである。

また桜は地面の浅いところの根から栄養を吸収するので木の根元には注意したい。また古くから“桜切るバカ梅切らぬバカ”と言う諺がありそれぞれ木には特性があるので、それに応じた対応が必要と思われる。

